

令和元年5月29日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01317

研究課題名(和文) 近世南海地震記録の現代語訳化；防災・減災活動への現地的活用に向けた実践的研究

研究課題名(英文) Modern language translation of the early modern Nankai earthquake record;
Practical research for local application to disaster prevention and mitigation activities

研究代表者

木村 修二 (KIMURA, SHUJI)

神戸大学・人文学研究科・特命講師

研究者番号：10419476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世に発生した東南海・南海地震津波に際し当時の人々が書き残した被災記録を体系的に収集・分析し、テキストの現代語訳化を進めた。具体的には、多くの地震・津波の被災記録が、局地性と広域性の二つの観点から記されていることを明らかにし、それが災害の持つ両義性に起因することを明らかにした。地域に伝わった被災記録を解読したいという現代の地域住民の需要に応えるべく、筆記文字の判読困難性、独特な文体の解釈困難性、記録事物の理解困難性といった諸障害を除去した現代語訳の作成を実践した。現地に赴き住民に直接過去の被災記録の意義を解説し防災の重要性を訴えるべく講演会やワークショップなどを開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、広域的な巨大災害の中にも局地的な差異が存在することを各地で同時代的に作成された近世の地震津波記録の分析を通して確認できたことに学術的意義があったと考える。

また現代人には読解が困難な近世の地震津波記録の現代語訳化作業を進めると共に、地域住民を対象としたプレゼンテーション活動も行うことで、地域住民自身が行う防災・減災活動に活用できるよう条件を整えたことに社会的意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)：In this research, we systematically collected and analyzed the disaster records written by people at the time of the Tonankai-Nankai earthquake tsunami that occurred in the early modern period, and promoted the translation of the disaster records into a modern language. In particular, we pointed out that many earthquake and tsunami disaster records were recorded in terms of both locality and regionality, and clarified that this was due to the dual meaning of disasters. We made a modern translation of the disaster record, eliminating the obstacles that make it difficult to read historical material, in response to the demand of the local people of today who want to decipher the disaster records transmitted to the area. We visited the area where we had a disaster in the early modern period, and held lectures and workshops.

研究分野：日本近世史、災害史、地域史

キーワード：地震災害 南海・東南海地震 地震津波災害記録 地震津波記念碑 地域防災 現代語訳 地域アーカイブス 和歌山県・徳島県

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国において過去に発生した歴史地震の記録史料は、これまで震災予防調査会(明治期)文部省震災予防評議会(戦前期)武者吉吉氏(終戦直後)都司嘉宣氏(昭和期)東京大学地震研究所(昭和期)宇佐美龍夫氏(平成期)らによって、全国網羅的に収集・公表されており、その恩恵は計り知れないが、いずれのケースでも歴史研究者ならば当然実施する史料批判を充分に行わないまま列挙するという限界性と、一般には極めて入手しにくいという状況があった(上記の史料集は東京大学地震研究所などによりweb公開が実現している)。それに対し最近、特に前者の課題に対しては、研究代表者木村の専門分野である歴史学研究の立場から主に新潟大学の研究者を中心とする前近代歴史地震史料研究会により『歴史学による前近代歴史地震史料集』が編纂・公表された。これは防災・減災への寄与をも念頭においたとされている点で本研究との視角の共通性もみられるが、歴史研究者による利用ということが前面に立っており、一部は現代語訳も施してはいるとはいえ一般の地域住民が利用するものとしては後者の課題のクリアーには至っていない。もちろん時期を宝永期に絞り、日本全国に点在するものをサンプル的に取り上げたあくまで試行的なものであることが断られてはいるが、こうした被災記録がいま被害想定区域内の住民からの需要があるという認識は編者たちにはあまりうかがえない。

近年、諸科学分野において学術成果の公共的利用を意識した姿勢が積極的に打ち出されている(STS、科学コミュニケーション論、公共考古学、公共民俗学など)という潮流を鑑みたとき、歴史資料を扱う史的研究分野においても一般社会との対等な関係性を前提にした活動実践が求められていると考える。もとより、史的研究分野でも、たとえば自治体史編纂への参画などアカデミズムにとどまらない活動は従来からなされてきており、黒田俊雄のような歴史研究者によって、文化財や地域史叙述が研究者や自治体などの立場にとどまらず、地域住民にとっても重要な意味を持つことが早くに指摘されている(「新しい地域史のために」(『日本史研究』183、1977年))。しかし黒田の指摘以降に発行されてきた多くの自治体史の通史叙述や資料編の高い専門性が、一般市民の理解に大きな障壁となっていることが指摘されることも多い。とりわけ自治体史の資料編は、くずし字を翻刻・活字化しただけのものも多く、現代の一般市民(地域住民)がその内容を理解するために現代語訳化を望む声が多い。

労が多いわりにその主観性(訳者の主観的解釈ととらえられがち)ゆえかこれまで学問的関心が高くなかった歴史資料の現代語訳は、近年にいたってかなり出版物も増えてきているが、それは上記のような一般市民の需要に出版業界が応じているからにほかならない。現代語訳は比較的学術系文庫のシリーズに含まれることが多いのが特徴である。比較的早いところでは講談社学術文庫から『日本書紀』や『御堂関白記』のような古代の有名史料のものが出版されてきているが、ちくま学芸文庫などでも『信長公記』や『応仁記』といった中世の軍記ものともいえる史料が現代語訳化されている。しかし、膨大な量がある近世文書についてはまだまだ着手されにくいのが現状である。しかし近世のものであっても歴史的災害の記録など現代にもすくなくならず意味を持っている史料については、現代語訳化を進める意義は極めて高いと考える。

2. 研究の目的

上記のような問題意識のもと、本研究では次のような全体構想を設定した。すなわち、近世(宝永・嘉永)に発生した東南海・南海地震津波に際し当時の人々が書き残した被災記録を収集・分析するとともに、テキストの現代語訳化を進め公表することで、現代の地域住民が防災や減災についての自律的認識の涵養や具体的方策の構築に資するよう条件を整えることである。その際、以下の点を具体的な目的として研究を進めてきた。上記地震・津波の被災記録が、局地性と広域性ととの両義性を有するという視点の理論的確立を目指した。地域に伝わった被災記録を解読したいという住民の欲求(需要)に応えるべく、筆記文字の判読困難性、独特な文体の解釈困難性、記録事物の理解困難性といった諸障害を除去した現代語訳の作成・公表を実践してきた。現地に赴き住民に直接過去の被災記録の意義を解説し防災の重要性を訴えるべく講演会やワークショップなどを開催した。

3. 研究の方法

本研究においては、南海地震の被害想定区域における地域史料の調査・解読を通じて、とくに近世(慶長・宝永・嘉永(安政))に発生した南海地震での被害実態など現象面での分析を行うとともに、専門性・平易性を併せ持った解説とともに文献史料の現代語訳化を進めてきた。そしてその成果を積極的に被害想定区域の住民に還元することを最大の目標に据えてきた。具体的には、東南海・南海地震の直接的被害を受けてきた和歌山県・徳島県を中心に、三重県や高知県に所在する近世の南海地震津波記録を調査・選出し、分析・現代語訳化を進めてきた。

研究成果を積極的に被災地域に還元する方法として、記録の判読・解説はもとより取り扱い方や活用方法といった内容にも踏み込んだリテラシー教育型の講座を地元自治体や協力者とともに開催(2017年10月28日於和歌山県白浜町富田)し、地域住民との対話を重視したサイエンスカフェ(2018年12月22日於徳島県海陽町)などを企画、実行した。

4. 研究成果(要旨)

(1) 文献史料の現代語訳論 近世地震津波関係記録にかかわって (木村修二)

近年、生涯学習の一環として古文書の読解を目指す人が増えている。そのばあい俗にミミズの這ったような字とたとえられる古文書特有の書体(くずし字)そのものを解読しようとする人が多い(木村「地域文献史料の活用」(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『地域歴史遺産』の可能性』(岩田書院、2013年))。こうした活動を通じて、古文書の世界が研究者だけでなく、一般にも身近なものになることが望まれるが、やはりそうした技術を得ないと接近しづらいものであることにはあまり変わりはない。古文書は、くずし字を解読して楷書体に変換しても、その文体は漢文に似せたいわゆる「そろろう文」の状態であり、まだまだ現代人一般の内容理解にはほど遠い状態である。史料の"一般化"を図るには、これをさらに読み下し文や口語体に翻訳するなどの作業を通じて、現代の私たちが通常使用している文体に近づけてゆく事、つまり現代語訳化する必要があると考える。しかし、なかなかこれが容易ではない。

古文書のような文献史料を現代語訳しようという発想は、たとえば、新書のような一般向けの書物において歴史叙述がなされるときなど、部分的な現代語訳が掲載されることがしばしばなされる。また自治体史誌において、全巻中に資料編を持っているばあい、本文編で資料編掲載史料が引用されるときなどには現代語訳した史料が掲載されることもあった。しかし、自治体史誌の資料編や独立した史料集として、古文書の翻刻が現代語訳のみで構成されるものはほとんどない。それは、大量に存在する史料に対して、大冊ながら限りある紙幅に可能なかぎり多くの史料を掲載しようと思うとき、どうしてもくずし字をそのまま活字化した翻刻文のみ掲載するのが精一杯であることに加え、相当の知識と労力を要する現代語訳を準備することが事実上困難とされることが多いためと思われる。限られた時間や予算のもと進められる自治体史誌編纂の現実にあってはやむを得ない面もあるが、そもそも自治体史誌がいったい誰を読者に想定しているのかということをお問うとき、従来あたりまえのように発刊されてきた資料編のあり方も問われるべきなのではないか。もとよりここでは叙述の根拠となる資料の提示が不必要であると述べているわけではなく、いわゆる通史編と同規格で、活字化したとは言え一般の人がほとんど読みたいと思わない状態で編集され、書架にずらりと横並びになるだけの資料編というものにあまり存在意義を認めていないだけである。たとえばWebでの翻刻文公開やブックレットのような簡便なペーパーバックでの発刊など提示のあり方にもっと工夫があってもいいのではないかと。一般の読者を明確な対象においた史料の現代語訳化などもそんな考えの一環と捉えており、これこそ専門の歴史研究者に残された最後の仕事群ではないかとさえ考えている。近世南海地震関係記録の現代語訳化研究を進めるにあたって、考えておくべき文献史料の現代語訳化についての諸課題について論じた。

(2) 改めて「現代語訳」の意義を考える 津波記念碑を中心に (松下正和)

過去に甚大な地震津波被害を受けた地域(地区)には、必ずといってよいほど津波記念碑が存在している。こうした記念碑には、主たる目的である出来事の後世への伝達・可視化という意義のほか、「建っていること」自体に意味があった。しかし、時が過ぎ近世に建碑されたものは、その碑文の内容が現代の地域住民に理解できなくなっている。それは、書かれている内容が漢文やいわゆるそろろう文など今日の日本では使用していない文体で記されていることや、碑自体の劣化(風化)により文字が物理的に判読できないなどの事情がある。

また津波記念碑をめぐる注意せねばならないのは、次に起こる地震津波被害が過去のものと同規模、同様の被害になるとは限らないことを十分認識することである。また再開発などの事情から記念碑が移動させられるケースが多いが、本来その場所に建てられていること自体に重大な意味(潮位や到達点の表示としてなど)があるにも関わらず何の施しもなされず移動させられたり、最悪の場合には廃棄までされたりといった実情がある。近年では記念碑への注目は高くなされ、都道府県や自治体の指定をうけて文化財化するものも多かったが、記念碑としての本来の意味が失われないように取り扱っていくことが大事である。また、せっかく建碑されても時の経過とともに存在そのものが忘却されることも、仕方がないこととはいえ、なんらかの対策が講じられなければならないだろう。岩手県大槌町で取り組まれている「3.11復興木碑設置プロジェクト」は大いに参考になる。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計24件)

(1) 木村 修二、富田・飛鳥神社の津波警告板、現地学習会和歌山県立博物館主催現地学習会「歴史から学ぶ防災 2018 災害の記憶を未来に伝える」, 2019年

(2) 松下 正和、誰にでもできる水濡れ資料の応急処置法、現地学習会和歌山県立博物館主催現地学習会「歴史から学ぶ防災 2018 災害の記憶を未来に伝える」, 2019年

- (3) 松下 正和、播磨の災害史(2) 播磨地域をも襲った南海地震、姫路市立生涯学習大学校郷土史講座(招待講演)、2019年
- (4) 松下 正和、古代の文献史料にみる和泉の災害、泉北教養講座(招待講演)、2019年
- (5) 松下 正和、改めて「現代語訳」の意義を考える 津波記念碑を中心に、「近世南海地震記録の現代語訳化」研究会(第3回)、2018年
- (6) 森元 純一、「熊野年代記」の史料論的意味について、「近世南海地震記録の現代語訳化」研究会(第3回)、2018年
- (7) 木村 修二、文献史料の現代語訳 近世地震津波関係記録にかかわって、「近世南海地震記録の現代語訳化」研究会(第3回)、2018年
- (8) 木村 修二、文献記録にみる南海地震津波 旧海南町域を中心に、海陽ヒストリーカフェ:記録から学ぶ防災、2018年
- (9) 松下 正和、海陽町の津波記念碑について、海陽ヒストリーカフェ:記録から学ぶ防災、2018年
- (10) 松下 正和、浦手形にみる海難・風水害、神戸史談会6月例会(招待講演)、2018年
- (11) 木村 修二、山門部材に記された安政地震津波の記憶、現地学習会和歌山県立博物館主催現地学習会「歴史から学ぶ防災2017 災害の記憶を未来に伝える」、2018年
- (12) 松下 正和、古記録に見る芦屋とその近辺の災害、芦屋古文書に親しむ会(招待講演)、2018年
- (13) 松下 正和、播磨の災害史(2) 播磨地域をも襲った南海地震、姫路市立生涯学習大学校「郷土史」、2018年
- (14) 木村 修二、近世地震津波史料の現代語訳に向けて 木板資料と紙資料、「近世南海地震記録の現代語訳化」研究会(第2回)、2017年
- (15) 松下 正和、災害資料を活かした自主防災活動について 津浪記念碑を中心に、「近世南海地震記録の現代語訳化」研究会(第2回)、2017年
- (16) 松下 正和、富田十九淵合同避難訓練への講評、富田十九淵合同避難訓練(招待講演)、2017年
- (17) 松下 正和、地域に残された災害資料を活用した自主防災活動 災害の記録と記憶の継承事例、第277回神戸大学RCUSSオープンゼミナール、2017年
- (18) 松下 正和、津波の記憶を伝える先人たちの工夫~白浜町富田の津波警告板を例に、史料調査成果報告会(和歌山県白浜町富田地区)、2017年
- (19) 木村 修二、安政南海地震を経験した富田の人びとの記録、史料調査成果報告会(和歌山県白浜町富田地区)、2017年
- (20) 木村 修二、木板に記された近世の地震津波記録序説、「近世南海地震記録の現代語訳化」研究会(第1回)、2017年
- (21) 木村 修二、由良町の安政地震津波記録の諸本、和歌山県立博物館主催現地学習会「歴史から学ぶ防災2016 災害の記憶を未来に伝える」、2017年
- (22) 松下 正和、災害資料を活かした自主防災活動について、和歌山県立博物館主催現地学習会「歴史から学ぶ防災2016 災害の記憶を未来に伝える」、2017年
- (23) 松下 正和、日本古代の災害史~播磨・摂津を中心に~、KCC・にっしん第53期リフレッシュサロン、2017年
- (24) 松下 正和、播磨の災害史 地震を中心に、姫路市シニアオープンカレッジ、2016年

〔図書〕(計6件)

- (1) 和歌山県立博物館編/木村 修二(共著) 和歌山県立博物館施設活性化実行委員会、先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える、2019、16
- (2) 『大字誌ふるさと請戸』刊行委員会編/松下 正和(共著) 蕃山房、大字誌ふるさと請戸、2018、206
- (3) 和歌山県立博物館編/木村 修二(共著) 和歌山県立博物館施設活性化実行委員会、先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える、2018、16
- (4) 奥村 弘・村井 良介・木村 修二(共著) 神戸大学出版会、地域歴史遺産と現代社会(地域づくりの基礎知識1) 2018、282
- (5) 和歌山県立博物館編/木村 修二(共著) 和歌山県立博物館施設活性化実行委員会、先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える、2017、16
- (6) 松下 正和、姫路大学、播磨の災害史 地震を中心に、2016、64

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：松下 正和

ローマ字氏名：MATSUSHITA, Masakazu

所属研究機関名：神戸大学

部局名：地域連携推進室

職名：特命准教授

研究者番号(8桁)：70379329

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：森元 純一

ローマ字氏名：MORIMOTO, Junichi

研究協力者氏名：郡司 早直

ローマ字氏名：GUNJI, Sanao

研究協力者氏名：前田 正明

ローマ字氏名：MAEDA, Masaaki

研究協力者氏名：藤 隆宏

ローマ字氏名：TOU, Takahiro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。